E 34

家庭における死蔵品の有効利用に関する研究（第2報）
死蔵品の活用経験の実態と志向

大阪樟蔭女大　○一棟宏子　本田　節

目的；本報では，各家庭における死蔵品の活用経験の実情とその志向を把握し，今後，活用を実践するためにとるべき方法について報告する．研究方法は前報と同様である．
考察；①大半の世帯が死蔵品を活用した経験をもっている．活用方法ベストスリーは「親戚・知人にあげる」「バザーに寄贈する」「廃品回収業者に出す」である．「親戚・知人」は衣類・身のまわり品，「バザー」は贈答品としてよく使われる食器，タオル，石鹸，「廃品回収業者」は古新聞・古雑誌，衣類と品目がある程度限られている．今後，もっと多様にモノを活用する方法を広めるためには，めんどうな手続きが必要でないこと，気をつかわなくてすむこと，トラブルに対する解決策を講じること，利用機関ができるだけ多くあり，かつ情報が手近に得られること，などを改善する必要がある．②ベストスリーのみの経験者を〈一般的活用型〉と名付け，他の方法を1つでも経験したことがある世帯を〈積極的活用型〉とすると，全体で〈積極的活用型〉は15％にすぎない．そして対象別にみると，その傾向にはかなり格差がある．③死蔵品をつくらないためには，レンタルの利用が考えられる．居住者のレンタルに対する希望は7割にのぼっているが，実際に借りた人は3割にすぎない．借りている品目も，スキー用品，貸し衣装，レコード，ビデオ，スーツケースなどが中心である．レンタルが普及するためには，経済的に安くつくこと，手軽であること，モノが豊富にあること，情報を広めることなどの条件を満たす必要がある
④積極的な活用方法やレンタルを利用した経験を持つ人は，今後の利用に対する希望がより高くなっているのが特徴としてあげられる．